

「鶴見大学仏教文化研究所紀要」第14号（平成21年4月）抜刷

〈公開シンポジウム〉「仏教福祉思想とその展開」

生老病死を見つめて

柳
澤
慧
二

生老病死を見つめて

柳澤 慧二

私は全く予期せぬ事情から鶴見大学の学長職につくことになりましたが、それにとまって仏教文化研究所の所長にもつくことになりました。しかし、先代の学長・所長である高崎直道先生のような正統的な仏教学者でありませんし、多少坐禅をした経験があるといっても、それは、とても皆様にそのことから得たものをお話できるような修行をしたわけでもございません。ただ私は50年ほど前に大学で医学を学び、「医」ということについて、多少の知識を得た後に、そのよって立つところの基礎医学の一つの領域である生理学の教育、研究に一生たずさわって参りました。

生理学はある意味ではわかりやすい学問です。生きていくためには、いろいろな働きがあります。たとえば、朝起きて顔を洗って食事をする。それぞれの動作時に、手足はどのように動くのか。食物は咀嚼されて胃の中に入った後、どのような運命を辿るのか。最終的に、一部は体の中に取り込まれ、一部は肛門から排出される。そういう仕組みは一見明白のようですが、考えてみるとわからないことだらけです。そのようなことを考えているうちに、一生が経ってしまいました。そこで、本日はそんな立場から、仏教という「生老病死」の「四苦」について考えて

みたいと思います。

まず始めに、本学で学生・教職員の方々に一冊ずつお持ちいただいている『聖典』をみますと、その中に『修証義』がおさめられています。その出だしのところを拝読いたしますと、「生を明らめ死を明らむるは仏家一大事の因縁なり、生死の中に仏あれば生死なし、但生死即ち涅槃と心得て、生死として厭うべきもなく、涅槃として欣うべきもなし、是時初めて生死を離るる分あり、唯一大事因縁と究尽すべし。」と書かれています。そこで、まず「生」とか「死」について、科学的に考えてみたいと思います。しかし、あらかじめお断りいたしておきますが、本日私からこの話を聞くことによつて生死について悟りを得たいといわれても、それはできない相談です。

「生」とは生きているということ、これは実はここに在る皆様は常に体験している状態です。「生」の形にはいろいろなものがあるでしょうが、ヒトが生きているとは、皆様がここにおられることです。冷暖自知という言葉がありますが、自分が生きていることは自分にしか体験できないことで、他人の生きている状態は現象としてあれこれ説明はできますが、体験することはできません。ヒトは脳の活動によつて、いろいろなことを考えることができます。その活動の状態を仮に名づければ「心」ということができるでしょう。その「心」はその人にしか体験できないことで、他の人の「心」を完全に知ることは不可能です。

ここで「心」について、少し古い禅籍からふれてみます。『五燈会元』の中で、初祖達磨大師と入門を許されて後に二祖大師となられる慧可との問答としてとりあげられている一節です。

「慧可云く、我が心 未だ寧からず、乞う師、ために安んぜよ。磨云く、心を将ち来れ、汝がために安んぜん。

可 良久して云く、心を覓むるにいに不可得なり。磨云く、我 汝がために心を安んじ了れり。」

これは禪の公案ですから、私はここで何も解釈はいたしません。しかし心の働きを何か物として体の中（脳の中）から取り出すことはできないことは感じられます。

ここで少しだけつけ加えますと、芳賀洞然老師（人間禪教団）はその著書『五燈会元鈔講話』の中で「慧可の良久という言葉について『やゝ久し』という意味ではあるが、これは数日間、あるいは数ヶ月の間真剣に努力したあとで、『心を覓むるにいに不可得なり』という見解を呈したはずである」と述べられておられます。公案を軽率にとり扱ってはいけないというご注意です。

私はこのごろ、心の働きをコンピュータとそのデータに対比して考えることがあります。コンピュータのハードの部分が働かなければ、ソフトに乗っているデータは全く無意味ですが、それらが働いていれば記憶装置（媒体）に入れられているものは他の人が再生できるかと思えます。心のそのような記憶媒体として、書物があったり、映像があったり、あるいは美術作品があったりしますが、「禪の公案」もその一つです。私たちの脳のハードの部分が作者の脳と同じように働いていれば、書物や映像や美術作品や禪の公案にこめられた作者の「心」が現われてくるでしょう。

思いがけず、話は「心」に進んでしまいましたが、ここでもう一度「生」に戻しましょう。

地球の誕生から45億年ぐらいたっていると考えられています。生命の誕生は40億年前ぐらいといわれています。40億年の生命の歴史の中で、人類の歴史はどのくらいかといえれば約600万年前に類人猿から二本足で立ち上がる

猿人が出現しました。そして200万年前くらいにホモ・ハビリス（器用なヒト）と呼ばれるものが出現して石器を製作するようになりました。これによって狩りの効率が向上したことが考えられます。続いて約60万年前にホモ・エレクトス（立ち上がったヒト）が出現して、アフリカからアジアへも進出しました。北京原人、ジャワ原人と呼ばれるものたちで、彼らは約40万年前くらいには火の使用を始めました。これらの原人や旧人と呼ばれるネアンデルタール人などはみな絶滅してしまつて、われわれの祖先はようやく20万年前に出現したホモ・サピエンス（かしこいヒト）です。彼らはやはりアフリカで出現し、石器や土器を使いながらアフリカを出て、6万年前に世界中に広がりました。これから人類の歴史がはじまるわけですが、この生命も実は永遠に続くわけではありません。あと50億年ぐらいで太陽の寿命が尽きるといわれていますので、そのときには太陽エネルギーに依存しているすべての生命も地球もほろびてしまうでしょう。しかし、宇宙全体としてみれば、星の誕生も消滅も一つの現象であつて、宇宙全体を構成している物質全体は不生不滅ということできます。

ヒトはこのようにして地球上に現れ、文明を造つてきました。ヒトが精子と卵子の結合によって受精卵となり分割をくり返しながら、新しい個体を形成していく。その細胞分裂の設計図はゲノムと呼ばれる数万个のDNAの塩基配列によって作られた情報です。生命の歴史、ヒトの発生、そして祖先から伝えられてきたDNAによって私たちの今日があるということは、大変にありがたいことです。

ヒトは子宮内で細胞分裂をくり返しながらだんだんヒトらしい形になり、約280日で誕生します。この瞬間から「生」がはじまり、乳児、幼児、小児、成人となつていく過程は成長といふことができます。

成人になつてしばらくすると、「老化」がはじまります。老化は個人差があり、また、その現われ方も多様です。たとえば頭髪は白くなつたり、少なくなつたりします。眼には水晶体といわれるレンズの作用をする部位がありま

すが、眼の遠近調節はこの水晶体の厚さが変化することによって行われています。水晶体の弾性がだんだんなくなると、近いところを見ようとしても水晶体が十分にふくらまなくなり、結果的に近いところの物体の像を網膜上に結ばせることが困難になるという老視（眼）がおこります。これを補うためには老眼鏡が必要です。耳は、若いときには20〜20kHzの音を感知することができのですが、高齢になるとだんだん高音の方から聞こえなくなってきます。会話域の音（数kHzまで）が聞きとれなくなれば、補聴器が必要になります。実はこれ以外の感覚でも、だんだんと感受性が低下する現象はおこりますが、それを補う道具は開発されていません。皮膚においては、弾力性がなくなつてしわが多くなったり、しみが出来てきたりすることも老化現象です。筋肉では筋線維が細くなつて筋力が低下して、いろいろな運動をすることに障害がおこるようになります。老化は、訓練によってある程度遅らせることができますが、不老長寿ということは不可能なことです。

ヒトが老化するということは生理的な現象で、避けて通ることはできません。医学が未発達であつた明治時代まで、子どもや若者は結核をはじめとする伝染病によって早死することがおおく、有名な滝廉太郎や樋口一葉は20代でなくなりました。しかし、本来ヒトを幸福にするための医学の進歩によって、ヒトの寿命が延びてきて高齢社会が到来した現在、老人が疎んじられ「老」がかつてのような尊称（たとえば寺院で使われる老師とか江戸時代の大老、老中、若年寄など）でなくなっていることは憂慮すべきことです。

このように、成長し老化していく過程において、さまざまな原因によって老化とは別に障害がおこってきます。それが「病」というもので、その原因としては、細菌、ウイルス、その他外来の物質によるものと、最近はやりの言葉でいえば、生活習慣病というように自分に責任のあることで起こってくる病氣とがあります。

ヒトは「病」にかかると、さまざまな運命をたどります。治る見込みのない病もありますし、簡単に治るものも

あります。しかし、病にかかったときを思い返してみますと、日常と違った生活から、孤独感を感じることがあります。このようなときに慰めの言葉をかけられると、気持ちが楽になるという経験をされたでしょう。自分が受けた慰めの体験を、今度は他の病んでいる人に対してしてあげるといふ気持ちになることは自然なことです。仏教は慈悲の宗教であるといわれていますが、これが福祉思想の根本でしょう。

病のときに経験する苦しみに痛みがあります。ヒトの感覚の中で、痛みは他の感覚に比べて慣れにくい（順応しにくい）感覚です。「順応」というのは生理的な現象で、例えば暗い部屋に入ったとき、最初は周りの様子がわからないのに、しばらくすると見えるようになるという現象です。痛みが慣れにくいのは危険に気づかないと困るという面があります。痛みは老化によってもなかなか変化しません。病による痛みは非常に困りますが、そのようなときに優しい言葉をかけられると、少し痛みが和らぐ経験もあるでしょう。これは脳の活動による感覚の減弱効果です。相手を思いやる福祉思想はここから出発しているといえます。

いずれにしても、ヒトは有限の生命です。最大生きて120歳とも180歳ともいわれていますが、その歳になれば「死」を迎えます。そして、死ねば、どうなるかといえは、それは、生命体としての活動はすべて停止して、あとはこわれていくばかりです。このときに「心」が別にあつて、それは永遠に残るといふ立場を私はとりません。前に述べましたように、生体に属している精神の活動は脳の活動であるわけですが、脳が活動を停止すれば、精神の活動も停止します。死んでも「心」が残るといふことはありません。

死後の「心」の存在は否定しますが、ヒトとして全く何も残らないのでしょうか。死後も私たちは、家族やまわりにいる人たちの記憶の中には存在を続けます。あるいは、先にのべたように著書や映像、芸術や禅の公案という形で存在を続けます。もっと科学的に考えれば、ヒトのDNA、あるいは生物のDNAは唯一の先祖からスタート

したと考えますと、生命の存在する限り、何らかの形で生命であり続けるでしょう。もしも生命が存在しなくなったときでも原子としては存在を続けます。宇宙がこわれるときがきても、何らかの形では存在していくでしょう。個人の死でも有機体としての個人は存在しなくなっても、原子レベルまでさかのばれば、不生不滅の原則は生きています。

以上、私は生老病死ということを生理学的な現象として眺めたわけですが、道元禪師は『正法眼蔵弁道話』の中でこの身と心の関係を以下のようにのべておられます。

「『身体と心性とは別々のもので、身体は死ねばなくなるが、心性は不滅であることを明らかに知れば、生死の苦しみから離れることができる。従ってこのように心性が常住であることを知ることが仏法の要諦である。』とよべる人がいるが、この考えは釈尊の開かれた仏法ではなくて外道の考えである。大唐国の慧忠国師も深くいましめておられる。本当の仏法は身心一如、性相（心の本性と身体）不二である。『生死即涅槃』『煩惱即菩提』である。」

先に述べました『修証義』の「生を明らめ死を明らむる」ということは、「心が残るという考えではないですよ」ということです。もちろん、仏教にも浄土宗、浄土真宗、その他宗派によつては浄土に行くという教えもあります。あえて生理学的にコメントをいたしますと「何が正しいかは経験しなければわかりません。その経験は死んでみないとわかりません。死ぬと生きるところに戻れません。」

皆様にはこれを機会に道元禪師が何をいわんとされたのかを探求していただければ幸いです。

さて、『正法眼蔵』は95巻とたくさんありますが、その『生死』の巻の最後に、「仏となるに、いとやすきみちあり。もろもろの悪をつくらず、生死に著することなく、一切衆生のために、あはれみふかくして、上をうやまひ下をあはれみ、よろづをいとふことなく、ねがふ心なくて、心におもふことなく、うれふることなき、これを仏となづく。又ほかにたづぬることなかれ。」と書かれています。「一切衆生のために、あはれみふかくして」というお言葉は次の演者の導入になるかと思いますので、私の話は以上とさせていただきます。ありがとうございました。